

2001年8月26日

サウル王がどうしても出来なかった事

【聖書】サムエル記上 13章5～23節

13:5 ペリシテ軍は、イスラエルと戦うために集結した。その戦車は三万、騎兵は六千、兵士は海辺の砂のように多かった。彼らは上って来て、ベト・アベンの東、ミクマスに陣を敷いた。13:6 イスラエルの人々は、自分たちが苦境に陥り、一人一人に危険が迫っているのを見て、洞窟、岩の裂け目、岩陰、穴蔵、井戸などに身を隠した。13:7 ヨルダン川を渡り、ガドやギレアドの地に逃げ延びたヘブライ人もあった。しかし、サウルはギルガルに踏みとどまり、従う兵は皆、サウルの後ろでおののいていた。

13:8 サウルは、サムエルが命じたように、七日間待った。だが、サムエルはギルガルに来なかった。兵はサウルのもとから散り始めた。13:9 サウルは、「焼き尽くす献げ物と和解の献げ物を持って来なさい」と命じて、焼き尽くす献げ物をささげた。13:10 焼き尽くす献げ物をささげ終えたそのとき、サムエルが到着した。サウルは彼に挨拶しようと迎えに出た。13:11 サムエルは言った。「あなたは何をしたのか。」サウルは答えた。「兵士がわたしから離れて散って行くのが目に見えているのに、あなたは約束の日に来てくださらない。しかも、ペリシテ軍はミクマスに集結しているのです。13:12 ペリシテ軍がギルガルのわたしに向かって攻め下ろうとしている。それなのに、わたしはまだ主に嘆願していませんと思ったので、わたしはあえて焼き尽くす献げ物をささげました。」13:13 サムエルはサウルに言った。「あなたは愚かなことをした。あなたの神、主がお与えになった戒めを守っていれば、主はあなたの王権をイスラエルの上にいつまでも確かなものとしてくださるだろうに。13:14 しかし、今となっては、あなたの王権は続かない。主は御心に適う人を求めて、その人を御自分の民の指導者として立てられる。主がお命じになったことをあなたが守らなかったからだ。」13:15 サムエルは立ち上がり、ギルガルからベニヤミンのギブアに上って行った。

サウルは、自分のもとにいた兵士を数えた。およそ六百人であった。13:16 サウル、息子ヨナタン、そして彼らの指揮下にいる兵はベニヤミンのゲバにとどまった。ペリシテ軍はミクマスに陣を敷いていた。13:17 ペリシテ軍の陣営からは遊撃隊が三隊に分かれて出て来た。一隊はオフラへ通じる道をシュアルの地に向かい、13:18 一隊はベト・ホロンへ通じる道に向かい、残る一隊は荒れ野の方角、ツェボイムの谷を見下ろす、国境に通じる道に向かった。

13:19 さて、イスラエルにはどこにも鍛冶屋がいなかった。ヘブライ人に剣や槍を作らせてはいけないうとペリシテ人が考えたからである。13:20 それで、イスラエルの人が鋤や鍬や斧や鎌を研いでもらうためには、ペリシテ人のところへ下るほかなかった。13:21 鋤や鍬や三つまたの矛や斧の研ぎ料、突き棒の修理料は一ピムであった。13:22 こういうわけで、戦いの日にも、サウルとヨナタンの指揮下の兵士はだれも剣や槍を手にしていなかった。持っているのはサウルとその子ヨナタンだけであった。13:23 ペリシテ軍の先陣は、ミクマスの渡しまで進んで来た。

【序】 The Dark Years (暗黒の期間)

1945年8月15日に日本が無条件降伏し、9月にイギリス軍がシンガポールに戻ってきた時、シンガポールの市民たちは大歓声を上げてイギリス軍を迎えました。つい3年半前まで118年間も植民地支配をしてきた国が再び戻ってきたのに、大喜びしたのです。それ程日本軍の短い支配は人々を苦しめたのでした。

建国の父と言われるリー・クアン・ユー氏がこう書いています。「永遠に続くと思いついていた英国支配が70日間の攻撃で崩れ去った。アジアの一民族が白人優越の神話を打ち砕いてしまったのだ。しかし日本人はいったん征服者になると、アジアの同胞に対して、イギリス人よりも無慈悲であった」。

ではアジアを植民地支配から解放するといいいながら、シンガポールで日本人はどのように無慈悲なことをしたのでしょうか。先日日本のバプテスト諸教会から来た 15 名の方々は 8 月 9 日のシンガポール独立記念日に戦争の歴史の跡を訪ねて 6 時間のバスツアーをしました。時間切れで幾個所も残ってしまったら、次の日予定を変えて 3 時間のツアーをやりました。そして日本では教えない歴史を学んで「本当によかった」と言って帰っていかれました。

一方シンガポールでは、今まで中学で学んできたその歴史を、昨年からは小学校 4 年生で学び始めるようになりました。教科書の題名も「The Dark Years」です。歴史の知識や見方で日本人とシンガポール人とのギャップがますます広がっていきます。これをどう埋めていったらよいのでしょうか。過去の出来事を知った者が、そこから学ぶべきことをきちんと学びとって、皆と共有しあっていくことだと思います。

さて私たちは先週、サウルがイスラエル最初の王に選ばれたことを学びました。今から 3000 年以上も前の、しかも日本やシンガポールからズット離れた縁の薄い国の歴史を学んで何になるのかと思う人もいるでしょう。でもその国の 2000 年前に起こったイエス・キリストの十字架という歴史的な出来事から、今の私たちの救いがもたらされました。その福音を証する聖書に記されている歴史を学ぶのですから、私の救いを深く受けとめることになるのです。

ではサウルがどのような王であったかを学びながら、今日の私たちの救いを深く受けとめることにいたしましょう。

[1] 優れた王

サウル王の物語はサムエル記上の 13 章から 31 章まで 19 章にわたって続き、最後にペリシテとの戦いにサウルが敗れて戦死する記事で、サムエル記上も終わっています。ところが物語開始早々のペリシテとの最初の戦闘に際して、サウルはサムエルから王として**失格者**だと宣告されています。

そして次に選ばれたのがダビデで、このダビデと比べられるものですから、サウルは損な役回りをさせられています。しかし聖書を繰り返し読みますと、サウルは最初の王として選ばれただけのことはあって、一つの点を除いては良い王でありました。

サウルの任務は周囲の国からイスラエルを守り、戦争に勝つことでした。14 章 47 節に「サウルは王権を握ると、周りのすべての敵と、更にはペリシテ人と戦わねばならなかったが、向かうところどこでも勝利を収めた」とあります。勝つために彼は、3000 人の軍隊を作り、息子のヨナタンと分担して兵士の訓練をしたのです(13:2)。

当時のペリシテとの力関係は、13 章 19 節以下にあるように、イスラエルの人々が剣や槍などの武器を作れないようにするため、鍛冶屋が禁止されていました。それで鋤や鋤やどの道具を作ることも研ぐことも、ペリシテに行ってしまうなければなりません。そしてペリシテの守備隊に

監視されていました。だからペリシテとの戦争の時、剣と槍を持っていたのはサウルとヨナタンだけだったと記されています。11章のアンモンに勝利した時、彼らの武器を大量に分捕ったでしょうから、これは誇張された表現でしょう。しかしペリシテと比べれば、お粗末な装備の軍隊だったことは確かです。それでもサウルはどこでも勝利を収めたのですから、すぐれた武将だったに違いありません。

サウルとヨナタンが戦死した時、ダビデが詠んだ哀悼の歌がサムエル記下1章にあります。「イスラエルよ、麗しき者は、お前の高い丘の上で刺し殺された。ああ、勇士らは倒れた。——サウルとヨナタン、愛され喜ばれた二人、鷲よりも早く、獅子よりも雄雄しかった。——ああ、勇士らは倒れた。戦いの器は失われた。」

サウルに妬まれて命を狙われたダビデですら、人々から「愛され喜ばれた二人」と評価しています。先週もお話しましたように、最小の部族ベニヤミン出身でありながら大部族のエフライムやマナセも、彼の許の一つにまとまっています。彼らはサウルが戦死した後もダビデにつかないで、彼の生き残った息子を跡取として盛りたてようとしています。

12部族がバラバラで、まとめるのに苦労したという記事が全く見られません。これは税金や労役などの負担で人々を苦しめなかったからでしょう。私腹を肥やそうという気配もなかつたからでしょう。今考えても大変優れた王だったと言えます。

[2] 神の戒めを守れなかった王

ではそのような王が、どうして**失格者**と宣告されたのでしょうか。今日の聖書の個所をよく読んで見ましょう。ペリシテの大軍が攻めて来ました。戦車3万、騎兵6千、歩兵は海辺の砂のようです。それを見て召集されたイスラエル兵どもは洞窟や岩陰、井戸などに身を隠したり、逃げ出す者も出てきました。サウル王の下に踏みとどまっていた3000人の軍隊も、震えているありさまです。サウルは早く戦いを始めなければ、兵力がどんどん減っていくと焦りました。

しかし律法には、祭司の言葉をもって戦闘を開始すると定められています(申命記20:2~5)。彼の許には神の箱と祭司が居たことは居たようですが、サムエルに敬意を払って、彼が来るのを7日間待ちました。それでも来てくれないので献げ物を捧げて礼拝してしまいました。するとそこにサムエルが現れて「あなたはなんと言ったのか」と叱りました。一見するとサムエルの方が意地悪い言いがかりを付けているように見えます。でも良く見ると違うことが分かってきます。

「あなたは愚かなことをした。あなたの神、主がお与えになった戒めを守っていれば、主はあなたの王権をイスラエルの上にいつまでも確かなものとしてくださっただろうに。」

(13:13)

サウルは神さまの戒めを守らなかったといわれています。ではその戒めとは？ 12章のサムエルの告別説教にはっきり言われています。

「今、見よ、あなたたちが求め、選んだ王がここにいる。主があなたたちに王をお与えになる。だから、あなたたちが主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の御命令に背かず、あなたたちもあなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならそれでよい。——さあ、しっかり立って、主があなたたちの目の前で行われる偉大な御業を見なさい。」(12:13~16)

私たちがこれまで読んできたサムエル記上のメッセージは、神の箱を持ち出して大敗北したイスラエル、神の箱を分捕って勝ち誇ったペリシテの災難、大祭司エリの家を下った裁きを通して、僕となって神さまに聞き従うことの大切さでした。自分の思いを遂げるために神さまを召使にする、自分が主になり神を僕にすれば決して祝福は得られないという人生の基本的真理でした。

王といえども神さまに聞き従うことから外れてはならないのです。ところがサウルは緊迫した戦場でその基本を何よりも大切にしようという自覚に徹することが出来ませんでした。優れた武将であった故に、戦況や戦略に心を奪われました。3000人の軍隊が600人に減っています。ぐずぐず出来ません。武将としての判断を優先させて、あくまでも神さまに聞き、その指示に従おうとはしなかったのです。

サウルにとって身近な歴史では、一時代前のギデオンの勝利があります。ミディアンの大軍135000人が押し寄せてきた時、ギデオンの許には32000人集まりました。でも神さまは多過ぎるといって、たったの300人に減らしてしまわれました。そして大勝利を与えてくださいました(士師記6~7章)。

彼はこの歴史を知っていたはずですが、でも知識としては持っていたとしても、自分の行動の指針にしようとはしなかったのです。一方、彼の息子ヨナタンは「主が勝利を得られるために、兵の数の多少は問題ではない」(14:6)といて、従卒と2人だけで敵陣に切り込んで行っています。だからサウルもその信仰に立てたはずですが、しかし彼はその信仰を持つことが出来なかったのです。

[3] 今も生きているサウル

どうして息子のヨナタンは持てたのに、サウルにはその信仰が持てなかったのでしょうか。私はこう考えます。王としてのサウルの任務は戦争に勝って国を守ることでした。そして彼自身優れた武将の資質を備えていましたから、勝つために強い軍隊を持とうと心を砕いたのです。「サウルの一生を通して、ペリシテ人との激戦が続いた。サウルは勇敢な男、戦士を見れば、皆召抱えた」(14:52)とあります。だから兵士の数に拘ったのは、彼の立場からすれば、当然のことだったのです。

経済の状況が厳しくなればなるほど、生存をかけた競争は激しくなります。勝ち抜くためには、安閑としておれません。でも勝つために何をやっても良いのでしょうか。経済にまつわるスキャンダルが次々と摘発されているではありませんか。やはり厳しいモラルが求められているのです。

将来の生存をかけて、子どもの教育にも力が入ります。幼稚園の段階から親の間で競争が始まり、音羽事件のような悲劇も起きました。シンガポールの子どもたちも、勉強、勉強と大変です。

信仰が大切なのはわかっている。でも神さまの言葉にばかり聞き従ってはいは、生きていけないのではないか。仕事や付き合いを大事にし、才知を働かせて商売を成功させたら、神さまのためにもっとお役に立てると考えて、礼拝を守らなくなってしまう働き盛りの人の姿も良く見かけます。先ずよい学校に入ることが大事なことから、今は教会よりも勉強をと、親はつい思ってしまいます。

競争に勝つには成績を良くして良い学歴や資格を持つこと。この世の知恵や自分の才覚を働かせること。その上で神さまの加護が加われば申し分ないと考える人が多いのではないのでしょうか。しかしそれが、戦争に勝つためには、優秀な兵士の数を少しでも増やそうと拘ったサウルの姿なのです。自分が強くなること、自分がうまくやることが何と言っても第一で、神さまの働きは付録なのです。

これに対してサムエルは、「さあ、しっかり立って、主があなたたちの目の前で行われる偉大な御業を見なさい」といいました。信仰とは、神さまの絶対の愛と絶大な力による偉大な御業を期待して、自分の生活の中心に神さまのお働き下さる場所を空けながら生きていく生き方を言います。天に向かって窓をいっぱい開けながら、神さまに期待して生きる生き方です。ところがそれが私たちにはなかなか出来ないのですね。

[結] 偉大な御業を期待して

先週学びましたように、サウルは最も小さい部族の最も小さい家の者だったから、王に選ばれたのでした。そして小さい者、弱い者、卑しい者に働いて、豊かな生涯を送らせてくださる神さまを証する王、であることを期待されたのでした。

でもそれを忘れて、自分で強くなり、自分で勝利を得なければとってしまったのでした。そして優れた王であり、武将でありながら、戦いに敗れて戦死してしまいました。

もしもサウルが神さまの戒めに固く立っていたら？

私たちは幸いにも、彼ほど優れていません。だから自分の小ささ、弱さに立ち続けていきたいものです。

「さあ、しっかり立って、主があなたたちの目の前で行われる偉大な御業を見なさい」という言葉を本気で信じて、神さま働きに常に期待しましょう。

神さまに聞き従うことを第一にして、生きていきましょう。